

分科会の概要（午前の部：7月1日（金）9:30～11:30）

第1分科会	第2分科会	第3分科会
企業図書館のファシリティーと利用者サービス	セルフアーカイビングとオープンアクセス	「レファ協」活用術
<p>今日の図書館を取り巻く状況は、IT技術の進歩や学術雑誌の電子化の進展、利用者による情報入手・発信経路の多様化など大きく変化しています。このような情報環境において、企業内の図書館ではどのような機能が求められ、利用者に何を、どのように提供することが求められているのでしょうか。また、それらの機能やサービスをどのように実現していけばよいのでしょうか。</p> <p>第1分科会では、全国研究集会の総合テーマ「変わる図書館 / 変わらない図書館 ～ 変化の時代の専門図書館を問う」を受け、「リニューアル」をキーワードに、企業図書館からお二人の講師をお招きします。講演では、図書館システムや図書館施設のリニューアルを通して、変えたことや変えなかったこと、その背景、実践における工夫などを担当者の視点からご紹介いただき、得られた経験やノウハウを参加者のみなさんと共有したいと思います。</p>	<p>図書館が所蔵するオリジナル性の高い資料や職員が作成する資料を独自の方法で整理・組織化して个性的で新しいコレクションを創造することができます。そのコレクションを容易に且つ自由に検索できるデータベースを構築することで、利活用が促進されます。</p> <p>独自のコレクションの形成やデータベースを有効に活用し、図書館の存在感を高めた国際協力機構図書館（JICA）では、職員が30年にわたる海外の調査・技術指導などによる報告書をアーカイブズ資料として電子媒体化を進め、歴史資料としても活用できるようにしました。これは企業の社史資料の構築にも通ずるでしょう。</p> <p>職員の生み出す学術資料を機関外から自由にアクセスできるようにし、それによって社会的広がりを獲得できたアジア経済研究所図書館（AID）では、学術資料のオープンアクセス化を進めた独自の学術研究リポジトリ（ARRIDE）を解説し、主題リポジトリとの連携やオープンアクセス資源にも言及します。</p>	<p>専図協では、国立国会図書館との間で、平成22年9月から2年間『国立国会図書館レファレンス協同データベース』の試用について合意し、本データベースの利活用について実践の機会を設けました。本データベースは国立国会図書館が監修の上作成しているため信頼度も高く、利用価値は大きいと考えています。また、事例を登録することで、自館のレファレンス機能の向上に役立てるとともに、自館の社会的認知度を高める効用もあります。3月末現在、50機関近くの会員機関が、試用登録をしています。</p> <p>今回の「レファ協」活用術の分科会では、レファ協に早い時期から参加し、積極的に活用している2館の担当者の方に、導入の経緯と有効活用されている事例を伺います。また、「レファ協」を運営する国立国会図書館の事務局の方にもコメンテーターとして参加いただき、「レファ協」をどのように活用すべきかをお話いただきます。</p>
<p>「図書館システムのリニューアルと利用拡大活動」 富士通(株)知的財産権本部 大森圭子氏</p> <p>「図書館リニューアル・人が集まる空間づくり」 NTT横須賀研究開発センタ図書館 小沢香穂里氏</p>	<p>「政府開発援助機関における組織ニーズとアーカイビング—その経緯と展望」 (独)国際協力機構図書館 前田和子氏</p> <p>「オープンアクセスとアジア経済研究所学術研究リポジトリ（ARRIDE）」 (独)日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館 澤田裕子氏</p>	<p>「レファレンスによる広告図書館の発展に向けて」 (公財)吉田秀雄記念事業財団アド・ミュージアム東京 広告図書館 粟屋久子氏</p> <p>「一石三鳥の効果—情報共有から情報提供へ」 愛知学院大学図書館情報センター LCO(株) 加藤由美子氏</p> <p>「レファレンス協同データベース—概要と活用法」 国立国会図書館関西館 佐藤久美子氏</p>
<p>司会 日高真子（(独)科学技術振興機構） 運営 青柳英治（明治大学）</p>	<p>司会 田村靖広（(財)東京市政調査会市政専門図書館） 運営 須貝弥生（(財)松竹大谷図書館）</p>	<p>司会 木村素子（(公財)日本海事センター海事図書館） 運営 高土正巳（東京商工会議所経済資料センター）</p>

分科会の概要（午後の部：7月1日（金）13:00～16:00）

第4分科会	第5分科会	第6分科会
著作権と専門図書館	専門図書館経営の新機軸	電子出版の展開と相貌
<p>情報提供の電子化が進展し、またそれに対応して著作権も変わっていく中、図書館運営を取り巻く環境が今後大きく変わることが必然です。図書館はこうした新たな動きに呼応する一方で、図書館でなければ提供できない情報を如何に守るか、こうした情報を多くの利用者の期待に応えられるように如何に提供するかを、これまで以上に真剣に考えなければならない時期にきております。</p> <p>専門図書館は、著作権に関するさまざまな問題に適切に対処しながら、情報環境の変化に対応した利用者サービスの向上に努めることが望まれます。</p> <p>本分科会では、著作権に関する認識を深めることを目的に、さまざまなテーマに取り組んできておりますが、今年は、こうした環境変化を意識して、最近の著作権政策の動向や関係法令に関するご講演と、書籍電子化の取り組み事例に関するご紹介をいただき、著作権についての理解や、著作権処理の経験・問題意識などを共有していきたいと思っております。</p>	<p>社会と情報環境の目まぐるしい変化の中で、現在、多くの図書館は、従来の運営方法の見直しと自館の存在価値の再検討を行う時期に直面しています。</p> <p>今後専門図書館が自らの存在価値を高めて、生き残っていくためには、戦略的な図書館サービスの提案と所属機関の経営者や利用者への積極的なアドボカシー活動が重要な切り札となるのではないのでしょうか。</p> <p>本分科会では、従来型の図書館から脱皮し、新しい発想で図書館経営の新機軸を切り開いている3つの図書館の先進的な事例報告を紹介し、今後の図書館経営のあり方について検討します。</p>	<p>電子書籍、電子出版とは何であるのか、それは第二のグーテンベルクとなるものなのか？「電子出版の展開と相貌」と題する本分科会は、ライブラリアン、エディター、ディストリビューターの異なる立ち位置からそれぞれ、この問いに向かいあいます。</p> <p>慶應義塾の入江氏は、大学出版会と連携した学術書の電子化と大学図書館での活用に関わる現在進行形の実証実験について。</p> <p>『マガジン航』(http://www.dotbook.jp/magazine-k/)を舞台に鋭く今日の出版を問う仲俣氏は、『ブックビジネス 2.0』（書籍+iPhone/iPad版）の編集も手がけられその体験も踏まえて電子出版の行く末について。</p> <p>丸善デジタル化推進本部の吉野氏は研究・学術分野でのこれからの電子書籍とその流通について。</p> <p>三者三様、電子書籍、電子出版の展開と相貌を多面的に検証することを試みます。</p>
<p>「最近の著作権政策の動向について」 文化庁長官官房著作権課著作物流通推進室長 山中弘美氏</p> <p>「近代デジタルライブラリーの構築と著作権処理」 国立国会図書館関西館電子図書館課著作権処理係 岡本常将氏</p> <p>「電子書籍でなにをを目指すのか—公有テキストを社会に積み上げた、青空文庫の15年」 青空文庫 富田倫生氏</p>	<p>「ウェブと情報技術をつかって資料と読者・著者を結びつける」 (独)物質・材料研究機構 企画部科学情報室 高久雅生氏</p> <p>「ヒト・モノ・カネの不足を補う逆転の発想—千代田図書館の新しい取り組み」 千代田区立図書館 新谷迪子氏</p> <p>「あらゆる場所に本棚を」d-labo (dream laboratory by SURUGA bank) BACH 幅 允孝氏 d-labo 山本貴啓氏</p>	<p>「大学図書館発、電子書籍への挑戦—慶應大学における電子学術書利用実験の報告」 慶應義塾大学メディアセンター本部 入江伸氏</p> <p>「インディペンデント・エディターの電子出版事始め」 フリー編集者、『マガジン航』編集人 仲俣暁生氏</p> <p>「研究・学術分野に向けた丸善の電子書籍の取り組み」 丸善(株)デジタル化推進本部 吉野知義氏</p>
<p>司会 時実象一（愛知大学文学部教授） 運営 及川直文（(株)日本政策投資銀行情報センター）</p>	<p>司会 村井友子（(独)日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館） 運営 木村美実子（(独)科学技術振興機構）</p>	<p>司会 水谷長志（(独)国立美術館東京国立近代美術館） 運営 長野裕恵（慶應義塾大学三田メディアセンター）</p>